
汝、魔を討つ刃となれ。

タナボルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

汝、魔を討つ刃となれ。

【Nコード】

N9230X

【作者名】

タナボルタ

【あらすじ】

少年は夢を見る。誰かの夢の記憶を。

少年は夢を見る。別の世界の誰かの記憶を。

少年は出逢う。魔導書の精霊と。

少年は出逢う。
『魔を討つ刃』と――。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

いやあ、怖い。

これが連載というやつか……!!

完結目指して頑張っていきまっしょい!!

プロローグ

様々な景色。様々な人物。

入れ替わり、立ち替わり、現れては消えていく。

人で溢れかえり賑やかな街。厳粛な教会。見かけとは裏腹に騒々しいその内側。巨大な屋敷。その地下に広がる、更に広大な施設。

浮かんでは消えていく。

慌ただしく歩き周り、だが明日への活力で満ちた街を行く人々。清楚なシスター。しかし意外とアグレッシブなその性格。麗しいお嬢様。美しさに潜む、その思いの強さ。凛々しい執事。鍛え抜かれた鋼の肉体、完璧なる仕事を行うその姿。

ただ浮かんでは、消えていく。

これは夢。

人が寝ている時に見る夢。

何の整合性も無い、ただただ唐突に始まり終わる、ただの夢。

——だが、そうではないとしたら？

これが只の夢ではなく、例えば、自分ではない、他の誰かの『記憶』ならば？

何の関わりも無いはずの、お互いが知らないはずの、『別の世界の誰か』の記憶だとしたら？

——それは、只の夢と言えるのだろうか？

この『夢／記憶』を見ているのは少年だ。

普通の人より助平で、普通の人より力を持ち、普通の人より破天荒な人生を『繰り返してきた』、ちっぽけな少年だ。

普通の人より両親が偉大だった。

普通の人より『力』があった。

普通の人よりコンプレックスが強かった。

普通の人より自分に素直だった。

そして、普通の人より危険な恋をして、結果、その恋を失った。

——魔神アシュタロス。

『少年』の敵。

『少年』の倒すべき敵。

『少年』の憎むべき敵。

『少年』の恋人の父。

『少年』に対する『黒の王』

かつては彼まで辿り着けなかった。

かつては彼に殺された。

かつては彼と共に戦い、死んだ。

そして今度は、彼を打ち倒した。

様々な犠牲があつた。

世界と恋人を天秤に掛けられた。

彼を倒すには、恋人に自分から止めを刺さなければならなかった。
選択出来ない。

出来るはずがない。

しかし、少年は選択した。

彼を倒し、自らが正しいと思う、自らが愛する世界を、選んだ。

例えようもない絶望が襲った。

何度狂えればいいか、何度正気を失ってしまえばいいか、何度死ぬ
ことが出来ればいいかと考えた。

考えた。考えた。考えた。考えた。考えた。

考えて、考えて、考えて、考えて、考えて。

考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考え抜

いて、答えを出した。

彼女は居ない。

だが、自分の中で生きている。

自分の娘として生まれ変わる可能性もある。

——悲しむのは止める。

後ろを見ない。

自分と彼女は『終わってしまった』のだ。

またかつての様な関係には戻れない。

少年は思った。

こんなのは自分らしくない。

こんなのは自分のキャラじゃない。

ウジウジ考えて、悲嘆に暮れるのはもう終わり。

前を向いて、いつもの自分を。

でも、いつもとは少し違う、ちょっとだけ成長した自分を。

——新しい自分を始めよう。

スケベでバカで情けなくて誘惑に弱くて泣いて喚いてバカやって、
でも強く正しくかつこよく。

弱きを助け、強きを挫く。

更には女の子にモテてお金持ちになって武道館でジョニー・B・グ
ッドを歌う。

少し、いやかなり高望みだが、これくらいの男にはなってやろう。

そう、思った。

今見てる『夢／記憶』の男を見ていると、もっとその思いが強くなる。

自分と同じく助平で。

自分と同じく貧乏で。

自分と同じく美人に弱く。

自分と同じく情けなく。

——自分と同じく恋人を失って。

でも、自分と違ってかつこよく。

自分と違って雄々しくて。

自分と違ってトラウマがあっても前向きで。

乗り越えて。

力も失い、ボロボロで、それでも戦って足掻いて立ち上がって。
巨大な敵も打ち倒して。

——自分と違って恋人も蘇って。

何ていう男だろう。

『後味悪い』なんて理由で巨悪と戦い、打ち倒すなんて。

なんてやつだ。なんて『でたらめなやつ』（デウス・エクス・マキナ）だ。

会ってみたいと思った。

話してみたいと思った。

意外にも話は合いそうだし、お互いに貧乏脱出計画でも立てようか。
（女性の趣味には同意出来ないが……）

会ってみたい。話してみたい。

自分と共通点の多いこの男……

——『魔術師』大十字九郎に——

そう、『GS』横島忠夫は『夢／記憶』の中で思った。

だが、横島忠夫は知らない。

彼と自分の更なる『共通点』

そう、倒すべき『本当の敵』のことを。

プロローグ

『The Dream／Memory』

四畳半のとあるアパートの一室。

着替えや雑誌、ゴミなどで少々散らかったその室内に、煎餅布団で眠る一人の少年が居た。

真面目にしていれば、その容姿は中々に良いのだが、いつもふざけたりおちゃらけたり泣いたり喚いたりしているので、それに気付いている者はかなり少ない。

そんな、少し損をしている少年。

少し前までは貧弱なボーヤと言われていたが、今は食生活が改善され、職場での激しい労働により筋肉もちゃんと付き、体脂肪率一桁という引き締まった見事な肉体を手に入れていた。

体格からか筋肉が目立つことはあまり無いが、見かけとは裏腹の力強さに惹かれる者も、ここ最近は多くなってきた。

まあ、元来の女好き過ぎる性格が災いしてモテる……という領域まで達していないのはかわいそうであるが……。

そんな少年だが、今は夢を見ているのか、少々魘うなされている。
かなり長い時間魘うなされていたのか、彼が寝間着として使用している
タンクトップのシャツは、寝汗でしっとりと濡れていた。

しかし、その時間もようやく終わりを迎えることになる。

窓の外が俄かに明るくなってきた。

——光。

地平線から昇り来る、巨大な一日の始まりの象徴。

陽が昇る。

瞼を灼く、強い光。

朝陽。

朝が来たのだ。

セットされていない目覚まし時計は、午前五時半を指していた。

「……ん、んう……。」

暖かい光に照らされ、少年は徐々にだが覚醒する。

「……朝、か……。」

むくりと半身を起こす少年。

寝ぼけ眼をゴシゴシとこすり、背筋を伸ばし伸びをする。

「ふぁ……もうそろそろシロの奴が来るな……。」

顔洗って朝飯の用意するか……。」

少年は欠伸をしながら布団から抜け出し、独り言を呟く。

シロとは少年の弟子である人狼という種族の妖怪で、ござる口調と白銀の長髪が特徴の可愛い少女のことだ。何故か頭髮の一部分が赤く染まっているのも特徴といえば特徴か。

とある事件をきっかけに少年と出会い、少年の特殊技能の一つ、『
霊波刀』に感服し、弟子入りをした。
その懐きぶりは凄まじく、端から見れば完全に少年に恋する乙女である。

一人暮らしをしているとついつい独り言を呟いてしまうのは仕方のないことだ。

少年は独り言の通りに顔を洗い、ついでとばかりにシャツを替え、ワイシャツを着てジーンズを履く。

その後冷蔵庫から卵とベーコンを二人分取り出した。

台所に行き、フライパンに油を引いてまずベーコンを焼く。

両面をカリカリに焼いたところで卵を投入。

面倒なのか、二人分一気にだ。

水を少し入れ、フライパンに蓋をする。

どうやらベーコンエッグを作るようだ。

少年は完成を待つ間に昨夜見た夢の内容を反芻した。

（あの夢……な〜んか所々曖昧だったけど、妙に気になるんだよな

！……。）

夢。

人が寝ている時に見る夢。

何の整合性も無い、ただただ唐突に始まり終わる、ただの夢。

（いや……そんな感じじゃなかったな……。あれじゃまるで……。）

まるで。

まるで、何なのだろうか？

その夢には主人公が居た。

もう名前も思い出せないが、恐らく自分より二、三歳ほど年上の男だった。

しかも忌々しいことにかなりの美形だ

ヒロインもいた。

夢の主人公よりも、今の自分よりもさらに年下に見える、ヒラヒラしたフリルが特徴の服を来た少女。

（あの女の子が出て来る度に……。何というか、キュンときたというか……。）

これは、夢の主人公の感情なのだろうか？

他にも何かと戦っている時には闘志やら焦りやらの感情があったように思う。

その時その時の感情が明確で、なにより実感が生半可じゃないレベルだ。

これではまるで……

（――誰かの、記憶みたいだな……。）

記憶。

誰かの記憶。

夢の主人公の記憶……？

（……んなアホな。）

少年は頭を振り、考えるのを止めた。

丁度良い感じに卵も半熟になっている。

いや、火が通っているから、もう玉子か……？

少年は益体もないことを考えながら、料理を皿に移した。

卓袱台にベーコンエッグの乗った大皿と、二人分のお茶碗を置き、昨日の晩にセットしておいた炊飯器の蓋を開ける。

ホカホカと湯気を上げ、銀色に光る綺麗なご飯が見える。

よし、とお茶碗にご飯をよそおうとしたその瞬間、外の方から地響きが聞こえてきた。

しかも段々と近付いてきている。

「来たか。しかしもうちょっとおしとやかに来れんもんかね、シロの奴……。」

少年は溜め息混じりに呟く。

次の瞬間には扉は思い切り開け放たれていた。

「先生ーーーーー！！ オハヨーでござるーーーーー！！」

今の時間帯には到底似つかわしくない程の元気過ぎる人狼少女、犬塚シロの来訪であった。

「はいはい、おはよーさん。それはいいが、近所迷惑だって何回言ったら分かるんだお前は。」

少年は挨拶を返しつつ、シロの頭を小突く。

当のシロといえば、ごめんでござると言いながら舌を出している。

と、急にシロが鼻をヒクヒクさせた。

「くんくん……。この臭いは……。ベーこんえつぐでござるか!？」

目敏く、卓袱台の上の料理を見つけるシロ。

もはやその目は料理に釘付けで、涎を垂らしている。

「おう。お前が来ると思ってちゃんと二人分用意しといた。さっさと食おうぜ。」

「はい！ いただきますでござる!！」

二人は卓袱台を囲み、お茶碗にご飯をよそい、手を合わせて『いただきます』をしてから食事を開始した。

その間シロはずっと尻尾をブンブンと振っている。

その様は狼と言うよりは、どこか犬っぽい。

可愛らしくはあるのだが……やはりまだまだ子供のようだ。

シロは美味しーでござるーとか、先生も料理の腕を上げたでござる
なとか、偶にはもっと肉が食べたいでござるとか言いながら、賑や
かに食べている。

対する少年はというと、ありがとうとか、おキヌちゃんにはかなわ
んがなーとか、贅沢を言うとか返しながら、やはり賑やかに食べ
る。

やがて同じタイミングで食べ終わり、ちゃんと手を合わせて『ごち
そうさま』をする。

食器は流しに置き、少しばかりの食休み。

この後はシロとの散歩と言う名の長距離マラソンが待っている。
ちゃんと時間を置かないとせっかく食べた物を吐き出しかねない。

とは言っても少年もシロもかなりの強度の胃袋を持っているので、
ほんの五分程しか休まない。

本当に食休みの意味があるのか甚だ疑問である。

少年はワイシャツの上にGジャンを着て、額にバンダナを締める。
靴を履き、シロと共に外に出て、ドアの鍵を掛ける。

アパートから少し離れた歩道の上で少年は準備体操をする。
十分に体が温まったところで、シロが話しかけてきた。

「それじゃあ先生、今日もお散歩頑張るでござるよ。」

「本来散歩は頑張るもんじゃないと思うんだがな。」

少年は少し落ち込みつつ答える。

週に四、五回程度の早朝散歩。

その距離は長くて五十キロメートルにも達する、デス・ハイクだ。しかも全力疾走しなければならないという暗黙のルールがある。

少年はもう諦めていた。シロは断っても断っても頼んでくる。

ならば潔く走って散ろう。

そんなことを思っ走り続けて幾星霜。

なんとかついて行けるようになっていた自分を誉めてあげたい少年だった。

「それじゃあ行くでござるよ、横島先生！」

「うえーい、手加減しろよ。」

二人同時に走り出す。

これが、横島忠夫の一日の始まり。

シロとの散歩を終え、アパートに戻ってきた横島。シロとはアパートの前で別れ、現在は一人で部屋の中に居る。今回の走破距離は約

十五キロメートル。横島の言った通り、少し手加減をしてくれたらしい。

現在の時刻は午前七時五十分と少し。

まだ学校には十分間に合う時間だ。

散歩で汗をかいた横島は、その汗を拭うために水で濡らしたタオルを電子レンジで温めた。

十分に温まったタオルで体の汗を拭い、服を制服に替える。半袖だ。

季節は初夏。

まだセミが鳴く時期でもないが、それでもかなり気温が高くなってきた。

横島は学校指定の鞆を持ち、ズボンのポケットに財布とハンカチを入れて部屋を出た。

戸締まりを確認し、いざ学校へ。

時刻は午前八時と少し。

横島は太陽に焦らされ、熱を上げるアスファルトの上を歩き始めた。

——学校。

横島の通う高校は、ある点を除いてごく普通の高校だ。

偏差値がそう高い訳でもなく、生徒の数が多すぎたり少なすぎたり

もしない。

敷地もごく一般的な程度で、どこぞの学園都市やらマンモス校みたいな広大な土地も無い。

ごくごく平凡な、普通の学校。

では、何が異常なのか？

それは、一部の生徒の存在である。

——GS。

——妖怪。

これらが生徒として学校に通っているのだ。

GSは横島をはじめ、半吸血鬼であり、最強最悪の真祖の吸血鬼『ブラッド・伯爵』の血を引く、見目麗しい金髪碧眼の少年『ピエトロ・ブラッド』

愛称『ピート』

まあ、少年とは言っても実際は七百歳なのだが……。

次は驚異的な精神感应能力を誇る巨漢、『タイガー寅吉』
自身の霊能である精神感应を使用すると、何故か体が虎になる。

その二メートルを越す長身と、重戦車のような体から繰り出す突進はかなりの威力を誇る。

何故か影が薄い。

ゴースト・スナイパー
GS。

現代の悪霊祓い。

恐らく、世界で最も金を稼ぐ事ができ、そして世界で最も金を失う職業である。

横島、タイガー、ピート。

この三人は、あと一人の少年を含め、GS界では若手最高峰と呼ばれている。

特に横島は、一般的にはまだまだ知名度は少ないが、全身の霊力を一点に集中し、鉄壁の強度を誇り、攻撃にも使える爆発小盾『サイキック・ソーサー』

伸縮自在の腕、霊を切り裂く霊力の刃『霊波刀』を展開出来る『栄光の手』（ハンズ・オブ・グローリー）

そして、神の如き力を持つ『切札』がある。

それを上手く操れば、あらゆる神魔をも討滅することが出来る、最強の『鬼札』

それらの存在が、横島を戦闘力だけならば世界でも三指に入る程の戦闘力を授けている。

加え、発射された弾丸を見切る動態視力、弾丸を避ける反射神経、相手のペースを乱す罠や話術。

横島が最強になる日が来るのもそう遠くないのかも知れない。

妖怪生徒。

学校机の九十九神である、『机妖怪の愛子』

見た目は黒い長髪の美しい少女だが、その本体は古ぼけた学校机であり、その体内には時間と空間の概念が通用しない『異界』が存在している。

かつてはあらゆる時代から生徒達を誘拐し、学校生活の青春を味わおうとしていたが、横島の上司である美神令子の説得や、誘拐されていた生徒達の言葉により改心し、現在では教師陣に最も信頼されている生徒として学校に存在している。

更には妖怪ではないのだが、花戸小鳩という女生徒に貧乏神から福の神となった『ビンちゃん』と呼ばれている神族がいるが、これといって説明することが無い。

せいぜい『チーズあんシメサババーガー』なる珍奇極まる物を売っていたぐらいだ。

（別名幽体離脱バーガー）

そんな最早どこが普通なんだよ、と言いたいぐらいの学校だが、意外にも世間からの評判は悪くない。

逆に妖怪や霊達に対する偏見が無くなってきているのは、この学校と、学校に通うGS、妖怪のおかげだろう。

——ワイワイガヤガヤ、と騒がしい朝の教室。

机に座り、話をする少年。

日直日誌を書いている少女。

教室の後ろの方でプロレスの技を掛け合う少年達。

ファッション誌を読み、現在の流行に意見を言い合う少女達。

嗚呼、素晴らしい。

少年達よ、輝きたまえ。

嗚呼、素晴らしい。

少女達よ、華を咲かせよ。

嗚呼、素晴らしきかな学校生活。

これぞ、これぞ正に――

「青春だわ……。」

感涙に咽び、うっとりとした声を漏らす黒髪の妖怪少女、愛子。

彼女の隣には金髪の少年ピートが佇んでおり、今の愛子の台詞に苦笑を漏らしている。

「確かにそうですね……。友達とお喋りをしながら先生を待つ。当たり前ですが、これは学生の時にしか出来ませんからね。」

ピートは窓の外に視線を向けながら呟く。

その声に若干の寂しさが混ざっていたのは、今までの七百年もの歳月を思い起こしたからだろうか？

家族と過ごした日々もあった。

家族から離れた日々もあった。

人と喜びを分かち合った日々もあった。

人に意味なく嫌われた日々もあった。

では、今は。

今は、どんな日々だろうか。

幸せな日々か。

不幸せな日々か。

騒がしい日々か。

穏やかな日々か。

優しい日々か。
厳しい日々か。
明るい日々か。
暗い日々か。

今は、確実にそうだと言える。
全てが混ざり合い、全てが輝いている。

幸せで不幸せで、騒がしくも穏やかで、優しくも厳しい、明るく暗い日々。

全てが極端に顔を出し、暴れ出し、混沌となった、辛くも楽しい毎日。

寧ろ嬉しい、楽しい事の方が多いのではないだろうか？

だとすれば、それはきっと彼のおかげだろう。

女好きで、お調子者で、優しく、嫉妬深く、泣いて喚いてバカやって……。

決める時は決める、残念な時は本当に残念な彼。

煩惱全開。
欲望全開。

最近は何故かかなり収まっているが、いつ何時暴走するか分からない彼。

見ていて飽きない彼。

僕の親友――

横島忠夫。

妖怪だろうが神族だろうが魔族だろうが、美人で可愛ければ関係のない彼。

女性男性だけでなく、種族や生まれも関係のない彼。

彼の存在に、自分がどれほど救われたか。

彼には感謝してもし切れない程の大恩がある。

彼からすれば当たり前なのだろうが、僕達からすれば、それがどれほどの救いか――。

願わくば、世界中の人々が、彼のような在り方であることを――。

………神よ、訂正します。
どうか、彼の煩惱だけは人々に伝染^{うつ}らなきように――。

「……ピート君の百面相なんて、珍しい物を見たわね……。」

どこか寂しげな表情をしたかと思えば、優しげな表情になり、楽しそうな表情になり、何かを祈るような表情をし、最後には冷や汗を流しながら胸の前で十字を切る。

愛子の台詞を聞いたピートは、またもや苦笑を漏らした。

賑やかで騒がしい教室。
そこに、ついに横島忠夫が到着する。

「おーっす、おはようさん。……ふぁ。」

教室の扉を開け、挨拶をしながら欠伸をする。

朝の散歩が良い運動となったのを加え、夢を見た分眠りが浅かったのが災いしたようだ。

アパートを出て途中までは良かったのだが、校門に着く頃には眠気が来た。

階段を上り、二階にある教室に着いた時点でもうかなり眠そうになっている。

横島の登校に気付いた生徒達は、皆挨拶を返す。
中には少し顔を赤らめた女生徒も居たようだが、それは誰にも気付かれずにいる。

横島はピートと愛子の近くの席に付き、二人に挨拶をする。

「ふあ……あ。おあよーっす、ピート……。愛子……。」

欠伸を繰り返し、目はショボショボして呂律は回っていない。
大分おねむなようだ。

「おはようございます、横島さん。何か、とても眠そうですね。夜更かしですか？」

「おはよう、横島君。夜更かしも良いけど、偶にはちゃんとシャキンとしなきゃダメよ？」

二人は横島に挨拶を返し、ピートは眠そうな理由を尋ね、愛子は横島を諫める。

それに対し横島は目をこすりながら答える。

「いや、夜更かしはしてねーんだけどさ……。朝のシロの散歩と、昨夜見た夢のせいだな……。」

シロの散歩。
それは良い。いつものことだ。

今までもシロの散歩が有った日は、横島は眠そうにしている。
……土日以外は。

では、夢は？

横島が夢を見て眠そうにしている。
一体どんな夢を見たのだろうか。

ピートと愛子は興味を引かれ、夢について尋ねる。

「いや、なんちゅーか……。夢の、主人公が色んな経験をしていく
んだが……。その時その時の感情が凄くてな……。」

言葉にしづらいのか、曖昧な感じに答える横島。

「感情……ですか？ 例を挙げれば、どのような……？」

ピートの質問に、腕を組み目を瞑って上を向く。

欠伸が出る。

「んー……。例えば、夢のヒロインが登場したら胸がキュンと
したり……。悪い敵が出てきたら怒りとか憎しみ？ とかが溢れそ
うになったり……。」

最早茫洋としている夢を思い出していく横島。
やはり、曖昧な部分しか覚えていない。

しかし、強烈に印象に残っているモノもある。

（あの女の子……。）

欠伸が出る。

白い、フリルが沢山ついた服を着ている少女。

紫がかった銀の髪と、翡翠の瞳、透きとおるような白い肌。

彼女が現れる度に動悸がおかしくなる。

早鐘を打つ心臓。

高鳴り、色めき立つ心。

何時までも、何処までも側に在りたいと高ぶる感情。

総て、あの夢の主人公の心／感情／気持ちなのだろうか……。

（そして……。）

欠伸が出る。

あの、敵に対する感情——。

怒りや憎しみ、焦燥や劣等感、恐怖、畏怖、狂怖……。

それらは全て悪しき感情だ。

自分を縛り付け、動きを、自分を変えてしまう。

だが、あの感情——。

あれは、何か違った。

同じなのに。

同じ様なのに。

かつての自分と同じはずなのに。

（正しい——感じがしたな……。）

欠伸が出る。

正しい、悪い感情。

（例えて言うなら『正しき怒り』……ってか？ 何かかっこいいな。）

欠伸が、出る。

そして、最後。

主人公の中にある、最初から最後まで一貫した気持ち。

何があっても揺らぐことのない、確かな気持ち。

何のことはない、大したことのない、ただただ普通のありふれた気持ち。

『後味の悪い気持ちはしたくない』

そんな気持ち。

だが、横島はそれを気に入った。

何か、胸にストンと落ち着いた気がしたのだ。

（後味悪い思いはしたくない……。うん、良いな、これ。座右の銘にしよう。）

欠伸が出る。

また、欠伸が出る。

『座右の銘』

美女、美少女の味方。

煩惱全開。

お前の彼女は俺のもの。俺の彼女も俺のもの。

後味の悪い思いはしたくない。

（完璧だな……。）

欠伸が出る。

目が霞む。

意識が遠ざかる。

横島の話聞いたピートと愛子は、その夢に対する自分の見解を語る。

「うーん……。よく分かんないけど、面白そうな夢ではあるわよね……。今度夢占いでもしてみたら？ 何か分かるかもしれないわよ。」

「夢の主人公の感情……。それはもしかしたら、誰かの記憶かもし

れませんよ?」

ピートの考えに思わず聞き返す愛子。
愛子に自分なりの考えを語るピート。

それを見ながら横島は、いよいよ自分の意識が遠い眠りの彼方に飛んでいくことを悟った。

「あー……つと、悪い。考えてくれているところ悪いけど、もう寝るわ。」

昼休みになったら起こしてくれ……。」

横島はそう言い、腕を枕にして机に突っ伏した。
意識は今にも飛んでいきそうだ。

「あっ、ちょっとダメよ横島君!　せめて先生が来て授業を始めてから先生の目を盗んで、さも授業を聞いているかのような姿勢で寝なさい!」

「寝るのは止めないんですね……。」

愛子のどこか間違ったツツコミに呆れつつ、ピートは呟いた。

その後間もなく始業ベルが鳴り、先生が来た。

横島は何とか意識を保ち、礼を済ませ、授業が始まった瞬間に頬杖を付き、教科書とノートを開き、シャーペンと消しゴムを用意して目を閉じた。

愛子の言葉を忠実に守ったようだ。

睡魔が襲う。
意識が薄れる。

ああ、そして――。

横島は旅立つ。
夢の世界へ。

そこで見る。
彼の記憶を。
彼の戦いを。

別の『世界』の、『誰か』の記憶。
何の関わりもないはずの存在――

――『魔術師』 大十字九郎の夢／記憶を――

プロローグ

『The Dream／Memory』

了。

タイガーは仕事で欠席だった。

プロローグ（後書き）

文体が安定しません！！

この物語は主人公二人、ヒロイン二人でお送りします。

ピートはヒロインじゃありませんよ？
本当だよ？

第一話（前書き）

お待たせ致しました。

第一話の投稿です。

今後このぐらいの文章量になるかもしれません。

それではお楽しみ下さい。

第一話

——少年は、夢を見ていた。

その夢で、少年は巨大なロボットに乗っていた。黒い鋼の肉体に、金色に輝く大きな角が映える、巨大な人型ロボット。

少年の操縦席の前部には、バイク型の操縦席に跨っている一人の少女がいた。

（……あの女の子かな……。）

——。
（……………？）

何かが聞こえた。

声が、聞こえた気がした。違う、と言っていたような気がする。

——。
——、——。

（何だ……。？ 何て言ってるんだ……。？）

相変わらず、何か聞こえる気がするが、ほとんど何も聞こえない。

一体誰が、一体何を話しているのかが分からない。

.....、.....

何とかして聞こうと思ったが、もう聞こえない。感じない。

もう、夢は別の場面に移り変わっていた。

——走る、走る、走る。前へ、前へ、前へ、走る走る走る。右へ、左へ、上へ、下へ、斜めへ、それ以外の角度へ。

後ろ以外に曲がって曲がって曲がって走る。走る。走る。走る走る走る走る走る走る。

『いい.....グナイいいイ.....。イイぐない、いいいいいい.....。』

声が聞こえる。異界の神を讃える声。瞬間、背筋が寒くなる。走っても、走っても、走っても逃げられない。

一定の距離を置き、つかず離れずで追ってきている。

『いぐない.....イグナイイ.....。よおおおおグソとおおお.....。』

体の横を、何かが通り過ぎる。

それは後ろから伸びてきた、肉の触手だった。

てらてらと何かしらの粘液でぬめり、鼻が曲がりそうな程の悪臭を放っている。

「……………っ!？」

触手が足に絡みついてきた。足を取られ、前のめりに走った勢いのままに倒れる。

したたかに体を打ったが、気にしている余裕などない。

——逃げなければ。

これは夢だ。それは分かる。分かっているのだ。

これは夢だ。人が寝ている時に見る夢だ。

分かっているのだ。分かっているのだが——

(——こわい。)

こわい。怖いのだ。恐怖で狂いそうなのだ。

背後より迫り来る兇悪で狂悪な何か、怖くて怖くて仕方がない。

もがきながらも前に進む。逃げるために。生き残るために。生きて、生きて、生き続けるために。自分の生を理不尽に終わらせないために。

でも、ああ、駄目だ。逃げられない。

何故ならば、もう、すぐそこに――――。

『いいくない！　イグナいいい！　よおおおぐそとおお
おおおおす！！』

俺の頭のすぐ後ろで、邪悪な雄叫びが木霊した。

『うわああああああああああああああああああああああ
あああああああ！！！！！！！！』

第一話

『制御出来ない感情』

——都内某所。

ビルや住宅の中に、ひっそりと佇む、少し古ぼけた洋館。

それは、横島の雇い主である美神令子の自宅兼除霊事務所だ。

現在そこに住んでいるのは、事務所所長である現役GSにして、世界最高のGS『美神令子』

三百年もの時を越え、現代に生き返ったネクロマンサーの少女『氷室キヌ』

金毛白面九尾の狐の生まれ変わりにして、シロのライバル？ 『タマモ』

そして人狼ござる娘『犬塚シロ』の四人である。

現在午後四時五十分。あともう少しすれば横島が来る時間帯だ。四人は横島について話つつ、横島が来るのを待っていた。

「最近のヨコシマって、何か変よね。無駄におとなしいっていうか……。」

「そうでござるか？ 先生は一緒に散歩して下さるし、現場では獅子奮迅の活躍をなさるし、一緒に散歩して下さるし、元気いっぱいでございますよ？」

「そうじゃなくてねえ……。」

タマモとシロはお互いに横島についての意見を出しているのだが、やはりシロは微妙にズレた発言をしている。そしてそれに突っ込むタマモ。それに反発するシロ。そして段々と口喧嘩に発展していく。

これがいつもの二人の様子。

「まあまあ二人とも。タマモちゃんが言いたいのはそういうことじゃないと思うよ、シロちゃん。」

キヌは二人を宥めつつ、シロに自分なりの意見を出す。

「タマモちゃんが言いたいのは……。多分、覗き……とか、えっちなことをしないとか、そんなことじゃないかなあ……？」

少し顔を赤らめて答えるキヌ。横島がセクハラをしなくなったというのに、何となく残念そうな顔をしているのは何故であろうか。

「ああ、確かにねえ。まあ覗きをしなくなったのは良いんだけどね。仕事もキチンとこなすようになったし、客からの評判も良いし、儲かるし……。」

美神は所長席で札束を嬉しそうに数えながら話に加わる。

一つ百万として、それが机に二十以上……。

美神令子除霊事務所は相変わらずの好景気のようなうだ。

「あ、なるほどでござる。」

シロもようやく得心がいったのか、手をポンと打った。だが、すぐさま思案顔になって疑問点を呟く。

「……確かに先生は最近せくはらをしていないでござるな。えろ本とやらも先生の部屋には無かったでござるし……。」

その呟きにその場の空気は騒然となった。

「はあ!?! 横島君の部屋にエロ本が無かったア!?!? 隠してるとかじゃないの!?!」

「そ、そんな!?! 見間違いないの!?!? 見間違いだと言ってよシロちゃああああん!?!?!」

「いやあああああ!?! これは天変地異の前触れ!?! 滅ぶの!?! 明日にでも世界は滅ぶと言うの!?! もっとお揚げ食べてれば良かったあああああ!?!?!」

三人はかなり失礼なことを叫んでいるが、これは以前の横島を知っているからだ。

——横島は女の子が好きだ。

横島は女の子が好きだ。

横島は、女の子が大好きだ。

もちろん美女も好きだ。美熟女も嫌いじゃない。美少女だって将来的には範囲内だ。

美少女に飛びかかる。セクハラをする。卑猥な発言をする。

それが横島だ。横島のナンパの仕方だ。

初対面の女性に

「生まれる前から愛してました。」

とか真顔で言える男、否、漢だ。

時には

「おっ嬢さああああん！！ この俺と熱い、熱いベレーズをおおおお！！
というか貴女と一発！！」

とかだっって言っちゃ困ったさんだ。

エロ本だって大量に持っている。たまに捨てられたりすることもあるが、いつの間にか大量に購入している。AVも然り、だ。

それに横島の霊力源は煩惱で、最も出力を高めることが出来るのは性的な刺激だ。だからこそ横島は煩惱少年だったわけなのだが……。

そんな横島が、エロ本を持っていなかった。

「この前先生の部屋と一緒に掃除して、ついでに家捜ししたけど本当に無かったでござるよ？ えーぶいとか言うのもそうでござる。」

——沈黙。

さっきまで騒々しかった三人がいつせいに黙り込んだ。それだけでなく、真剣な顔でそれぞれの意見を出す。

「……流石にそれはおかしくない？ たとえヨコシマがセクハラを自重してるんだとしても、自宅でくらい見たり読んだりしてもいいはずだし……。」

「もしかして、女の子に興味が無くなった……とかは……？」

「それはないない。だって、この前横島君たら、空を見上げながら『女の子っていいなあ……。ありがとう、神様。女の子を創ってくれて……。』って、物凄く爽やかな笑顔を浮かべて呟いていたのよ？」

「それはもう病気では……？」

「それに、横島君の霊力源は煩惱だし、出力だって上がってきてるのよ？ ならエロ本だのAVだの持っていないはずが……。」

「……ですよねえ。」

「」「うーん……。」「」

結局三人は考え込んでしまった。横島の煩惱についてここまで真剣に考えるのもどうかと思うが、最近少々寝不足気味な横島を心配し
てのことだった。

「……横島さんが来たら聞いてみますか？ その……え、えっちな
本は捨てたんですかって……。」

キヌは顔を少し赤らめる。流石に恥ずかしいようだ。

「ま、それはシロの役目よね。」

「何ででござるか？」

「それはね、シロがヨコシマの弟子でね、ヨコシマにね、一番信頼
されてるからなのよー？」（超棒読み）

その台詞を聞き、シロは舞い上がった。
単純である。

そんな風に賑やかにはなしていると、屋敷全体から声が響いてき
た。

『美神オーナー。横島さんがいらっしゃいました。』

その声は屋敷に宿る人工霊体『渋鯖人工幽霊一号』である。

元々霊力源である霊能者が現れず朽ち逝くのを待っていたのだが、

紆余曲折を経て美神令子をオーナーとし、何とか『生き延びる』ことが出来た。そんな彼が横島の来訪を告げる。

「噂をすれば何とやらってね。それじゃ、本人に話を聞いてみましょうか。」

美神はそう言って席から立つが、人工幽霊一号が待ったをかける。

『その横島さんなのですが、どうも様子がおかしいのです。』

「……？」

その言葉に皆は首を傾げる。

一体どう様子がおかしいのだろうか。

正直横島の様子はいつもおかしいと言っても過言では無いのだが……。

『どうもひどく憔悴しているらしく、ピートさんが付き添いをなさっています。』

「先生が……でござるか!？」

シロは人工幽霊一号の言葉に驚き、大声を上げる。

タマモは眉に皺を寄せ、うつむき加減に考え込む。

「と、とにかく上がってもらいましょう! 何かあったなら休んでもらわないと……!」

キヌは美神に進言する。一体横島に何があったのか?

それだけがキヌにとっては心配だった。

「……横島君を上げてちょうだい、人工幽霊。ここまで来れたんだから大丈夫とは思うけど、とりあえず二人に話を聞かないと……。」

『了解しました、オーナー。少々お待ち下さい。』

人工幽霊一号の声が数秒途切れる。

その後、玄関の扉が開いた音がした。

そして、美神達の部屋に横島とピートが入ってくる。

「おはようございます、美神さん。おキヌちゃん、シロタマ。」

「お久しぶりです、皆さん。」

横島は顔を青ざめ、ピートに肩を貸して貰っていた。

その姿に美神は驚き、キヌは慌てて横島をソファに座らせる。

タマモは何も言わないが、横島の額に浮かぶ汗を拭いてやり、シロは横島に「元気が出るでござられ!？」と少々混乱しながら骨付き肉を勧めた。

もちろん横島は食べられなかった。

それから数分後。

美神達は横島の話聞いた。

今まで見た主人公達が居る夢、そして先程見た、『自分が主人公になっている夢』の話を。

「夢の主人公の感情が流れ込んでくる……。巨大ロボットに乗ってる夢……。何かに追われる夢……。ねえ。」

美神は話を聞き、腕を組みながら思案に暮れる。

「しかも、そのときそのときの感情がとても鮮明に浮かんでくる……。ですか。」

キヌは横島を心配しながら、答えを出そうとする。

「横島さんは授業中に居眠りをしていたのですが、急に魘され出したと思ったら、叫び声を上げて飛び起きて……。」

ピートは苦い顔をしながらその時のことを思い出す。

「しかも、夢の時の怖いって感情が残ってて、皆の前でボロ泣きしちゃって……。今思い出しても怖いんすよ。化け物が後ろから追ってきて……。」

俺はGSだからそういうのは平気かと思ってたんすけど……。」

横島は夢の化け物を思い出し、体を震わせる。

歯の根が合わない。

ガチガチと音がする。

——背筋が凍る。

恐怖が蘇る。詳細に、鮮明に、克明に。思わず両手で体を抱きしめる。

そんな横島の様子を見て、美神は考える。

一体何故そうなったのか。

夢。

ヒントはこれだろう。

そして答えも恐らくこれだ。

夢の主人公。

その感情。

流れ込んでくる。

……追体験？

……夢の主人公の記憶を……？

美神はまだハッキリとしないまま、意見を出してみる。

「……………横島君は、もしかしたら、波長が合う誰かの記憶を『夢』という形で追体験しているのかも……………」

「追体験……………ですか？」

「……………。」

ピートは少し混乱したような顔をしたが、横島は違った。

「やっぱりって顔してるわね、ヨコシマ？ 心当たりでもあるの？」

静観していたタマモが横島に尋ねる。

横島は何となく、と曖昧な返事を返した。

とにかく原因さえ分かれば対処法も分かる。
つまり……。

「寝なければ良いのでござるな！」

自信満々に胸を張るシロ。

最近少し成長し、女の子特有の膨らみが目立ってきた。

横島はその膨らみを見ながら何言ってるんだこいつはと思った。

「寝なきや死ぬでしょ、バカ犬。もう少し考えてから発言しなさい。」

タマモはやれやれといった感じでシロを見やる。

それに怒るシロ、宥めるキヌ、苦笑する横島。

いつもの風景だ。

美神はそれを見ながら自分なりの意見を言う。

「要は夢を見なければいいんだけど……。生憎私はそんな霊具は持っていないわね。それより、その波長を何とかしないと駄目ね。親父の仮面、ママに言ったら用意してくれるかしら……？」

美神は精神感應能力者用の制御装置を考えるが、横島はそれを否定

した。

「いえ、実はタイガーに借りことがあったんすけど、全然効果が無くて……。文珠で結界を張っても駄目でしたし……。」

「文珠でも駄目!？」

その言葉に全員が耳を疑った。

——文珠。

横島の『切札』

神の如き力を奮う最強の霊具。

今まで幾多の危機を乗り越え、数多の敵を葬った、横島の『鬼札』使い方次第では、如何なる神魔をも打倒する。

それを用いても、夢を見る。

感情が流れ込んでくる。

横島は、正直お手上げだった。

まだ『決定的な何か』を見ていないというのは何故か分かるのだが、このままではそれに至るまでに夢に精神を殺されかねない。

おかげで煩惱もあまり沸いてこず、性欲を発散しようとする気すら起こらない。

「そんな……文珠でも駄目だなんて……。」

キヌは両手を口元に持って来ている。
それほど衝撃が大きかったようだ。

「寝ないのも駄目、制御装置も駄目、文珠でも駄目では……。」

——打つ手が無い。

「せんせい……。」

シロは目に涙を溜め、横島にすり寄る。

横島の苦しみを人狼特有の嗅覚と、それ以外の『女の嗅覚』で読み取った。

少しでも、少しでも苦しみを和らげようと体を寄せる。

横島はそんなシロを見て苦笑を浮かべ、頭をそつと撫でた。

タマモはそんな二人を見て、少し複雑な心境になる。何故そうなるかは自分でも分かっていないが、その感情を内に閉じ込め、横島の体のシロとは反対の側に身を寄せた。

美神は考える。

どうすればいいのか。このままでは横島が精神衰弱で、夢に殺されかねない。

前世の恋人を、現在の弟分を、未だ秘めたる想いを打ち明けずに奪われてたまるものか。

まだ横島は私に相応しくはないが、どんどん理想に近づいて来ている。

ならば、それをどこの馬の骨とも知らない『夢の主人公』とやらに奪われてたまるものか。

横島は考える。

この先どうすればいいのか。

夢に殺される？

このままでは確実だと言えるだろう。

——横島は制服のポケットに手を入れる。

小さな、小さな箱に手を触れる。

その中にはとある『霊破片』が入ってあった。よっぽどのが無い限り、肌身離さず持ち歩くそれは、箱の中で、弱々しい光を放っていた。

しかしそれは、その霊破片が横島を案じているような、優しい、柔らかな光だった。

やがて美神は決断をする。

ここで考えても仕方がない。打つ手が無い。

ならば、もっと上の存在ならば——？

人間とは、『格』の違う存在ならば、何か分かるのではないか。

美神は決断をする。

「よし、こうなったら……。」

美神の言葉に、皆振り向く。

美神は少し笑みを浮かべながら、答えた。

「困った時の、神頼みといきましょう。」

その一言に、シロとタマモ以外は皆ハッとなった。

「そうか、僕達だけでは打つ手が無くても、神族——小竜姫様達なら何か分かるかも！」

「しかもヒヤクメ様だっているはずですし、もしかしたらジークさん達もいるかも知れません！」

皆に希望が戻ってくる。

「何か分かんが、それで先生が助かるんでござるな！？ 良かったでござる——！！」

シロなど号泣している。

タマモも、口には出さないが、どこかホッとしている。

美神はうんうんと頷いた。

皆が騒がしくなるのを見て、手をパンパンと鳴らし、注目を集める。

「とにかく、今から妙神山に向かいましょう。ピートには悪いけど、

念のために唐巢神父や他の皆にも話をしておいて。何か他にも解決方法があるかもしれないから。」

「はい、分かりました。横島さん、とりあえず横島さんは明日から二三日休むと学校に連絡をしておきますね。」

「ああ……。頼んだ、ピート。授業のノートはよろしく。」

ピートは美神に言われた通り、唐巢神父、小笠原エミ等知り合いのGSに話を聞くために帰っていった。

妙神山へ向かう準備は他の皆がしてくれている。
ありがたいと思いつつ、横島は目を閉じ、息を吐く。

——恐らく、妙神山でも収穫は無いだろう。

横島はそう思った。

否、確信していた。

他のことはともかく、この『夢』のことに關しては、そう思えるのだ。

何か、もっと上の『存在』

神族や魔族でもない。

もっと別の存在。

何かは分からない。

分からないのだが、これだけは言える。

——この『夢』に関係しているのは、もっと上の、おぞましい『何か』だと言うことだ——

用意が出来、美神達一行は妙神山に向かう。

そこで何が分かり、何が分からないのかは未だ不明だ。

一縷の希望と多量の不安を抱え、舞台は妙神山へと移り変わる。

——箱の中の『靈破片／蜚』の光が、少し強くなった——

第一話

『制御出来ない感情』

了

第一話（後書き）

巨大ロボットって良いよね。ロマンだよね。

ヒロインは一体だねのでしょうか？（邪笑）

横島君って、普通にしたら美形だと思います。
横島君と是非友達になりたい。

感想もお待ちしております。

それではまた次回へ。

第二話（前書き）

お待たせしました。

第二話です。

それでは、お楽しみ下さい。

ところで、デモンベインのエセルドレーダってめちゃんこ可愛いよね。

第二話

——妙神山。

日本有数の霊山にして、神の住まう山。

鬼にして妙神山修行場の門番、右の鬼門と左の鬼門。

修行場の管理人、小竜姫。

そして、小竜姫の直属の上司であり、師匠。世界にその名を轟かす魔猿、『斉天大聖』孫悟空。

かつて世界に宣戦を布告した魔神アシタロスの娘の一人、蝶の化身パピリオ。

以上の神魔族が妙神山修行場に住んでいる。

たまに遊びに来る友人として、神族の調査官ヒヤクメ、魔界正規軍の軍人ワルキューレ、その弟ジークフリート、パピリオの姉ベスパがいる。

今はデタント（緊張緩和）の時代。

神族と魔族が手を取り合う時代。

勿論それは、人間や妖怪ともである——。

第二話

『妙神山へ』

妙神山の麓。

そこに一台の大型車が止まる。扉を開け、現れたのは五人の人。即ち、美神、キヌ、横島、シロ、タマモの五人である。

「着いたわね……。後はここを登っていくだけね。」

美神は妙神山を見上げながら言う。

元々は横島の文珠で転移をしようとしたのだが、横島の精神の衰弱具合が思ったよりも酷く、二個の文珠の同時使用すらも出来ない状態だった。

なので麓までは車で、そこからは徒歩で登山という形になる。

横島は多少休んだおかげで体力も精神力も幾分か回復し、何とか修行場くらいまでなら元氣も持つだろう。元々二十〜三十キログラムはあるのかという荷物を背負い、頂上まで汗一つかかず、息一つ乱さない程の体力があったのだ。それにシロとタマモ、美神もいる。

慎重にいけば、横島ならば問題は無いであろうと思われる。

（皆さんは真似をしないで下さい。危険です。）

基本的に他のGSに比べて体力の無い方のキヌは、シロ、タマモの両名にサポートをされながら登ることになる。

「ここが妙神山でござるか……。出来れば、純粹に修行という形で来たかったでござるな……。」

シロは横島に寄り添いながら呟く。横島を危険にさらさないよう、ちゃんと気を付けながら山を登っていく。

シロがぼやくのも無理はない。妙神山修行場は日本でも最高の修行場であり、GS見習いとして、侍として、何より横島の弟子としてシロは強くなりたいと思っている。

しかも修行場の管理人は神剣の使い手。

修行で来たかったというのは紛れもない本心だ。

「何言ってるの。今のあんたじゃまだまだ駄目よ。修行場にまでなら辿り着けるだろうけど、今のあんたの実力じゃ鬼門達にも劣るわよ？」 地道に修行してなさい。」

「はいでござる……。」

シロは美神の厳しい言葉に少ししよげながらも足は止めずに登っていく。

鬼門達は確かにやられる場合が多いが、それでも鬼の一族である。パワー・タフネス・戦闘経験はシロの上をいく。美神のような反則スレスレの手には弱いが、正攻法でいけばそれなりに強い。

ただ単に今まで戦ってきた相手が悪かっただけなのである。

タマモはキヌの手を引き、ゆっくりと登っていく。美神達とは一定の距離が空いているが、密集しすぎるのも危険なので、これはこれで問題は無い。

タマモはキヌの顔を見る。汗をかき、息が乱れてきている。

山を登り始めもうすぐで一時間と三十分。キヌの体力を考えれば、そろそろ休憩を入れるべきだろう。横島だって体調は悪いのだ。休憩は多く取った方がいいだろう。

そう考えたタマモは美神に休憩を申し入れる。

「ねえ、美神。そろそろ休憩にしない？ 修行場まではまだまだあるだろうけど、ヨコシマも本調子じゃないし、おキヌちゃんだって辛いだろうし……。」

タマモは最後の方はキヌの額の汗を拭ってやりながら言う。やはりこの道無き道を登っていくのは想像以上に厳しいようだ。

美神はタマモの意見を聞き、キヌと横島の顔を見る。

横島はまだ余裕がありそうだが、多少息が乱れていた。

普段の姿からは想像が出来ない。

キヌは額にびっしりと汗をかき、息もかなり乱れている。これは休憩を入れるべきだろう。

「分かったわ。それじゃあ十分〜十五分程休憩にしましょう。ちゃんと水分も取るのよ？」

美神はそう言って背負っていたリュックから水筒を取り出し、中の水を口に含む。

普段なら横島に持たせていただろうが、今の横島にそれは出来ない。昔の美神ならばそれでも持たせていただろうが……。横島やキヌ達との触れ合いで、美神の性格はかなり丸くなったようだ。

「ひゃあゝゝ……。やっぱり、大変、ですねえ……。」

キヌは近くにあったやや小ぶり岩に座り込み、ふうふうと息を吐きながら声を出す。

ちらちらと横島に目をやり、自分同様に体力を極端に消耗していないか、心配になっているようだ。

タマモはそんなキヌを見やり、汗を拭ってやったり、持っていたペットボトルの水を差し出し、水分を補給させる。

さすがにシロやタマモは妖怪らしく余裕で、美神同様にほとんど体力を消耗していないようだ。

シロは山の頂を見据え、此処からの残りの距離を計算している。

山育ち故の特技で、今のペースで行けば、約二時間半程で辿り着けるだろうと当たりを付ける。

普通の人間では考えられない程のハイペースである。

現在の時刻は午後七時半をとうに過ぎている。

辺りもかなり暗くなってきた。本来ならば夜間の登山は遠慮しておきたいのだが……。美神達は最後まで行くつもりだ。GSとしての『

『靈感』が疼く。

今日中に辿り着かないと、何か悪いことが起きるだろうという予感。

それがどのような物かは分からないが、横島に関係していることなのだろうことは分かっている。
何かが囁きかけるのだ。

その悪い予感は、『横島にとって』の悪い予感なのだというのを。

横島は皆を見て、考える。

迷惑をかけている。

最近はずっとGSとしての資料集めや修行、美神の負担を減らすために色々な勉強もしている。

強力な霊や魔族、妖怪と対峙しても、冷静に対処出来るような知識を得るため。少しでも事務所の経営を助けるための知識を得るため。自分の力を高め、泣いている誰かを助け出す『力』を得るために。

馬鹿をやりながら、騒ぎながら、泣いたり喚いたりしながら、セクハラしながらも頑張ってきた。

全ては、あの日のような想いをしないため。

誰かを助けるのに誰かの犠牲を出さないために。

そんな、残酷で、悲惨で、救いがなくて、憤怒にまみれ、情けなくなる、『後味の悪い思い』をしないために。

ちよっただけ成長したと思っていた。

大人に近づいたと思っていた。

でも、まだまだだ。

また自分はこうして、誰かに迷惑をかけている。

『自分のために』、『誰かに迷惑をかけている。』

そんな自分が、嫌になった。

そんな時——。

「——何て顔してるのよ、ヨコシマ。」

「……………タマモ?。」

タマモは横島を見る。

何か俯いて考えているようだ。

その表情は、苦虫を噛み潰したかのようにも見える。

また、馬鹿なことでも考えているのだろうか？

そう思える。

ヨコシマは変な奴だ。

バカでマヌケでうるさくて騒がしくてお調子者でコンプレックスが強くエッチで変態でセクハラ野郎で。

でも優しくてたまに賢くてたまにカッコ良くていつも守ってくれて助けてくれて。

どっちが本当のヨコシマなのかが分かりやしない。

あるいはどちらも本当のヨコシマなのかも知れないが、そんなことはどうでもいいのかも知れない。

どっちにしても、ヨコシマの近くは気が楽なのだ。

自然なままです、変な意地をはらなくてよくて、自分自身をさらけ出せる。

シロ達ではそうはいかない。

シロは必要以上に突っかかってくるし、おキヌちゃんは天然が入ってるから少し心配だし、美神は何かというか、近くにいると少し緊張するし。

それでも大切な家族であるのは間違いないが……口うるさい妹、ドジなお姉ちゃん、しっかり者だけど、少し怖い姉……といった感じだろうか。

その点ヨコシマならモーマンタイだ。

変に気を使う必要もないし、最近は頼りがいも出てきて心配する必要もあまりないし、近くにいて緊張するどころか、逆に心が落ち着いて安らげる。

それに何よりきつねうどんを奢ってくれる。

ヨコシマ行き着けのうどん屋のきつねうどんはとても美味しい。

まだまだ短い人生経験の中でもぶっちぎりでナンバーワンだ。そんなうどんをおかわり有りで奢ってくれるのだ。

「しゃーねーな。それで最後にしろよ？」

と、笑顔で言ってくれる。

言うなれば、面倒見の良いお兄ちゃんか。

——私は、そんなヨコシマの笑顔が好きなのだろう。

だから、ヨコシマが何かを考えて暗い顔をしているのが我慢ならなかった。

大方、自分が皆に迷惑をかけているのが嫌なのだと考えているのではないだろうか。

だとしたら、ヨコシマはきつとバカなのだろう。

こんなのは迷惑なんかではない。

まともに口に出して話すのなら恥ずかしいが、心の中でなら言える。

大事な『家族』のためならば、このくらいのことなど迷惑なんかではないのだ。

現代に蘇った私。

現代に生まれ変わった私。

殺生石の中から、唯一人で『産まれた』私。

ひとりぼっちのまま殺される恐怖を味わった私。

そんな私に、家族が出来たのだ。

心から信頼しあえる、気が置けない関係。

その『家族』の一人が暗い顔をしている。

ならば、それを何とかするのが家族というものだ。

本来狐は群れないのだが、こんなのも良いと私は思う。

皆ひとりぼっちじゃ駄目だ。

だから、今のヨコシマが寂しげに、『ひとりぼっち』に見える、見えてしまうのは、ヨコシマの心の在り方が少しいつもと変わってしまったからだろう。

だから私は。

だから私は、ヨコシマに話しかけた。

「……………タマモ？」

横島はタマモに話しかけられ、どう答えたらいいかを考える。

自分はそんなに酷い顔をしていたのだろうか？

確かにポーカーフェイスとは程遠いが、それでも思いを顔に出したつもりはなかったのだが……。

「言っとくけど、ヨコシマが考えるようなことなんて筒抜けよ？
顔に出さないようにしてたんでしょうけど、まだまだね。」

タマモはフフンと鼻で笑いつつ言ってくる。

ご丁寧に一步一步ゆっくりと近づきつつ、手振りを交えながら、だ。

「な、何だよ……。」

何となくバツが悪くなった横島はそっぽを向いて、口を尖らせる。
その子供っぽい仕草が、横島にはよく似合っていた。

タマモは、横島のすぐ側にまで歩み寄った。

「……大方、皆に迷惑をかけてるとか、そんな自分が嫌になったとか……。」

そんなこと考えてたんでしょ？」

「な……………」

凶星だった。

しかし、それを悟らせまいと言葉を發せようとするが、思わず言葉に詰まってしまう。

横島の身長は一七〇センチメートル中盤であり、タマモはその横島より約頭一つ半程背が低い。

タマモの頭は横島の胸元程の位置であり、自然と横島の顔を下から見上げる形になる。

未だ幼い外見と言えども、その容姿は最高レベル。流石の横島も、上目遣いのタマモにドギマギしてしまう。

「言っとくけど、こんなのは迷惑なんかじゃないわよ。」

「……………え？」

その妙に遅い反応に、自然と笑いが込み上げてくる。

だからか、タマモは先程の想いを話すことにした。

皆に対する想い。

横島に対する想いを。

「……………『家族』……………か。」

横島はぽかんとした表情で呟く。

それに対し、タマモは勝ち気な笑顔で答えた。

「そ。だからさ、あんまり考え込むんじゃないわよ？ ヨコシマはいつも通りバカでマヌケでお調子者でないと、こっちの調子が狂っちゃうんだから。」

最後に舌をべーっと出す。

それを見た横島は、その考えを聞いた横島は。

不意に、笑いが込み上げてきた。

「……………くくっ……………。なるほどな、そうかそうか……………」

口元を手で押さえ、肩を震わせる。

そんな様子を見たタマモは、少し顔をムツとさせる。

「ちょっと、そんなに笑うことないじゃない……………」

少し頬を膨らませつつ、また横島の顔を覗き込む。
その瞬間――。

「うりゃ。」

「ふみっ!？」

頬を、両側に引っ張られた。

「そらー悪かったなータマモ。お兄ちゃん勘違いしちゃってたか？」

「ふにゅにゅにゅにゅ!？」

「おおー、やーらかくてよく伸びるなー。」

「ふにゅあー!？」

その後十数秒頬を弄ばれ、タマモの頬は少し赤くなっていた。
タマモは涙目になりつつも頬をさする。

「うう……。ヨコシマに弄ばれた……。」

「人聞きの悪いことを言うな。」

横島はタマモの頭にそっと手をやり、優しく撫でる。

「……ありがとな。」

そして、誰にも聞こえないように、小さな小さな声で感謝を述べる。

横島はタマモに聞こえないようにしていたが、当然妖狐であるタマモが聞き逃すはずもなく。

「んんんん？　なあんか言った、ヨコシマ……？」

ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべながらからかわれる。

その顔を見た横島は優しく撫でるのを止め、

「なんでもねえよっ。」

ぐしゃぐしゃと頭を少し乱暴に撫でる。

「うきや……っ！？　ち、ちよつと、髪が、自慢のヘアースタイルが……！！」

何とも賑やかな二人である。

横島も、ようやく元に戻ったようだ。

シロとキヌは、そんな二人の様子を指をくわえて見ていた。
やがてシロは我慢出来なくなったのか、

「先生――っ!! 拙者も弄んでくだされ――っ!!」

と突貫していった。

「お前も人聞きの悪いことを言うな――っ!! ワイはロリちゃんや――!!」

「シシシロちゃん落ち着いて――!!? それは女の子が言っている台詞じゃないわ――!!」

本当に賑やかである。

美神は皆を見て思う。

(中々、良い家族^{チーム}になってきたわね……。)

今の喧騒を見て思う。

もし自分に年の近い兄弟がいたら、こんな感じで毎日が過ぎていくのだろうと。

天然な妹。

元気一杯な妹。

クールでしっかり者の妹。

そして、バカでスケベな、面倒見の良い弟。
妹達にとって、良いお兄ちゃん。

そして、意地っ張りでお金が大好きな、皆のお姉ちゃん。

そんな家族^{チーム}。

孤独な青春を過ごした美神は、今こうして『家族』といわれることを嬉しく思った。

もちろん自分にも他の皆にも家族はいるが、これも一つの家族の形なのだろう。

血の繋がりでなく、『絆』で繋がった家族達。

こちらとて、本当の家族なのだ。

そして数分後。

「はいはい、そろそろ出発するわよ。辺りも暗いけど、そんだけ元気なら問題無いでしょう。」

手をパンパンと鳴らし、美神は皆を促す。
皆は一斉に頷き、修行場を目指す。

途中、少し危ない場面もあったようだが、皆の力で何とか乗り越え、ついに一行は辿り着く。

道が開けた。

視線の奥には遠くにあるせいで小さく見える、巨大な門。ついに、辿り着いた。

ここが、『妙神山修行場』――。

了。

第二話（後書き）

デモンベインは？

ねえ、デモンベインは？

すいません、まだ出てきません。

もちょっと待って下さい。

ところで、デモンベインのアルってめちゃんこ可愛いよね。

感想お待ちしております。

第三話（前書き）

お待たせ致しました。

第三話の投稿です。

今回は横島君が変わった理由が語られます。

では、一言。

ルシオラファンの皆様、大変すいませんでしたあああああ！！

第三話

——妙神山修行場。

日本における最高の修行場の一つ。

その門の前に、五つの人影があった。

即ち、横島、美神、キヌ、シロ、タマモの五人である。

「ようやく着いたわね。……横島君、おキヌちゃん大丈夫？」

「……な、何とか、大丈夫ッス……。」

「ぜ、全、然っ、はひっ、ひいっ、だいじょ、じょ、じょぶ、ですよっ、みか、みみ美神さんっ、はひっ、はひっ。」

横島はともかく、キヌはもう見るまでもなく疲れきっている。流石の美神もこれには汗を垂らしている。

「……おキヌちゃんは体力をつけなさいね……。」

美神はキヌに一言だけ伝え、妙神山修行場の門に目を向ける。

——ぐお～～。

「……………」

——すぴ〜。

「……こいつら……」

門には鬼の顔がついている。

妙神山修行場の門番、右の鬼門と左の鬼門の顔だ。

その顔はいかにも鬼といった、中々に厳つい顔だ。

しかし、その厳つい顔も、鼻から出ている鼻提灯のせいで台無しだった。

「寝てるっすね。」

「寝てるでござるな。」

「寝てるわね。」

「ね、寝て、ます、ねえ……」

鬼は寝ていた。

「……………」

美神はスツと右手を上げる。

その手には、いつの間にか神通棍が握られていて、バチバチと靈氣によるスパークが起こっている。

「門番のくせに……！ さつさと、起きなさい！！」

そのまま神通棍を右側の鬼門の頭頂部に思い切り振り下ろした。

「にぎやー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！？」

爆発、閃光。

哀れ、右の鬼門は美神の圧倒的な怒りの靈力により黒こげに……。

左の鬼門も、自分のすぐそばで起こった惨劇の凄まじさに飛び起きた。

「み、右の！？ どうした！ 何があった……！？」

目に入った。

長い髪がゆらゆらと陽炎のように揺らめき、鬼神の如きプレッシャーと般若の如き形相をした美神が。

左の鬼門はその美神を見た瞬間から、今までの人生を振り返っていた。

気がついた時には右の鬼門とともに生まれていた。

妙神山修行場の門番として造られた、人工的な鬼族。

それが自分達。

来る日も来る日も門番として、修行に訪れる人間達を叩き、殴り、潰し、帰す。

そこには感情も何もいらず、ただただ機械的に日々を過ごすだけだった。

当時の修行場管理人もそれを望んでいた。

只の道具として鬼門達を扱っていたのだ。

しかし、そんな日々も終わりを迎えることになる。

管理人が変わった。

そう、小竜姫が新しい管理人になった。

小竜姫は鬼門達をただの門ではなく、道具ではなく、命ある者として扱ってくれた。

自分達に食事を作ってくれ、自分達の体を磨いてくれ、更に自分達に名前をつけてくれた。

（まあ『右の鬼門』『左の鬼門』とそのまんまだったが……。）

鬼門達は疑問に思った。

何故自分達にこうまでしてくれるのだろう、と。

小竜姫はこう答えた。

「当然です。貴方達は今までこの修行場を守ってくれていたのですから。

それに、貴方達は私にとって、この修行場の先輩でもありますから。そんな貴方達を敬うのは、それこそ当たり前ですよ。」

——嗚呼、これが。

鬼門達は思った。

——嗚呼。これが、この方こそが、我等の女神か。

涙が溢れた。

恥も外聞も無く、号泣した。

小竜姫はそんな自分達の頭を、ただただ優しく撫でてくれた。

とても、暖かい手だった。

初めて誰かの暖かさを知った。

その時から、鬼門達は小竜姫に忠誠を誓うこととなる。

全ては小竜姫の……姫様のために。

我等の『命』はただ姫様のためだけに在る。

姫様の前に敵が立ち塞がるならば、我等がその敵を打ち倒そう。

姫様の命が奪われようとするならば、我等が命を代わりとしよう。
姫様が望むのならば、我等は如何なることも成し遂げよう――。

「あが……が……が………。」

そんな誓いを思い出していたが、既に鬼門達の命は風前の灯火だった。

荒ぶる美神の霊力は止まることを知らない。

しかし、そんな鬼門達に救世主が現れる。

「あら、何ですかこんな夜更けに騒々しい。」

門をギィツと開いて出てきたのは、妙神山修行場管理人、『龍神』
小竜姫その人であった。

「あら、鬼門ったらまたボロボロになって……。相変わらず役立たずですねえ……。」

「「あが……が、がががが………がくつ。」」

鬼門達は仲良く逝った。

「つて、あら？ 美神さん達じゃありませんか。どうしたんですか、こんな夜更けに。」

小竜姫はようやく美神達に気付き、人懐っこい微笑みを浮かべながら歩み寄る。

「……まあ良いわ。今回は、横島君のことでちよつとね……。」

美神はその様子に少し言いたいこともあったが、それを飲み込んで本題を話す。

その顔は、苦味に顰めている。

「横島さんの……？」

横島の名前を聞き、小竜姫はおかしいと思った。

いつもならここらへんで横島が自分に飛びかかってくるはずだ。

それが、無い。

ふと、横島の顔を見やる。

「お久しぶりです、小竜姫様。相変わらずお美しい……！ ぽかーもーたまりませんっ！！」

爽やかな笑顔でいつも通りの台詞をのたまう。

しかし、台詞とは裏腹に勢いが全く無く、飛びかかるどころか、顔は多少青ざめ、汗を流し息も乱れている。

いつもの横島からは考えられないその状態。

これはただ事ではないと直感した小竜姫は、真剣な表情で皆を中へと案内する。

「……初めて見る方々も居ますが、どうやらただ事では無い様子。良いでしょう、中へとお入り下さい。ちょうどヒヤクメやジークさん達もいらっしやいますから。」

そう言って前へと歩き出す。

美神達五人は頷き、小竜姫の後へと続く。

鬼門達は傷もそのままに、ボロボロなまま放置された。

その目元が光ったのは、もしかしたら涙が流れていたからなのかもしれない――。

無言で歩く一行。

母屋にたどり着こうとした、その時――。

「ふわぁ……。どうしたんでちゅか、小竜姫？　なんか爆音が聞こえたでちゅよ……。？」

目元をパジャマの裾でこしこしと擦り、眠そうに欠伸をしながら現れたのは、横島の妹のような存在で、蝶の化身、アシユタロスの娘の一人、パピリオであった。

「……パピリオ？」

横島は彼女の名前を呼び、身を乗り出す。
久しぶりに彼女の顔が見れるからか、若干嬉しそうに見える。

「あ……………！」

対するパピリオは目を見開き、驚きの声を上げる。

次第にその体はフルフルと震え、目には涙が溢れてくる。

やがて堪えきれなくなったのか、パピリオは思い切り勢いをつけ、
横島の胸に飛び込んだ。

「ヨコシマ……………！！ 会いたかったでちゅ……………」
「……………」

「げぶおはああ……………！！？」

若干高度が足りず、鳩尾にパピリオのタックルが決まった形になった。

「先生……………！」

「横島さは……………ん！？」

「ヨコシマ……………！」

これには皆仰天であった。

しかし、驚いている暇などない。

横島は夢のせいで気力、体力共に衰弱していた。
それに加え、妙神山修行場までの道のり。

さらにパピリオの強烈なタックル。

自分の腹の辺りにすり寄って大泣きしている妹分には悪いが、横島は意識を保てなくなった。

「パピリオ……。次からはもっとおしとやかに飛び込んでくれ……。」「

それを口に出すのが精一杯。

横島は白目を向いて気絶してしまった。

「先生――！？　おのれ、よくも先生を――！？」

「うるさいでちゅよ、この犬――！？」

「横島さ――ん！　起きて下さ――い！！」

「ヨコシマ――！！　寝たら冗談抜きに死んじゃうわよ――！！？」

シロは叫びパピリオに向かったが簡単に吹き飛ばされ、キヌは気絶した横島を見て泣き叫び、タマモは横島の頬をビタンビタンと叩き、

起こそうとする。

「……………ハア。」

そんな喧騒を見て、美神は額に手をつき、溜め息を吐いた。

第三話

『ツライゲンジツ』

それからややあって。

美神達は居間に居た。

そこには美神、キヌ、シロ、タマモ、小竜姫、パピリオ、ヒヤクメ、ワルキューレの八人が居る。

横島はパピリオのタックルで気絶したため、今は客間で寝かされて

いる。当初は美神以外の事務所メンバーが横島の看病に立候補したが、小竜姫は皆の話を聞きたいと言い、その代わりにジークフリートが横島の看病をすることにした。

「……最初に聞いとくけど、なんでワルキューレ達が居るわけ？」

美神は当然の疑問を出す。

小竜姫は修行場管理人、ヒヤクメはちよくちよく遊びに来ている。パピリオはここで修行。

しかし、ワルキューレとジークフリートは魔界正規軍に所属しているため、滅多なことでは妙神山に来る理由が無い。

その疑問に答えたのはヒヤクメだった。

「実は、上からの命令で海に沈んだ『究極の魔体』の残骸の回収をしていたんだけど、つい二三日前にそれが終わったの。だから今は休暇という名の待機状態なのね。」

何か問題があればすぐに駆り出される。下っ端はつらいのね。」

『究極の魔体』の回収任務。

彼女達が居る理由はそれだった。

美神とキヌはハッとした表情になるが、シロとタマモは首を傾げている。

「……何なのよ、その究極の魔体ってのは……。」

「……気になるでござるな。」

二人は皆の様子から、何か尋常な物ではないと察するが、美神から『また後で話す』と言われ、渋々下がる。

今重要なのはそれではない。

今、最も重要なのは――。

「――横島のことだが。」

ワルキューレが口火を切る。

「奴はどうしたのだ？ 此処までの道のりで疲労し、パピリオのタックルで気絶し、聞くところによれば小竜姫にセクハラもしなかったそうじゃないか。何か悪い物でも食べたのか？」

最後は冗談めかしたが、その顔は真剣そのものだ。

横島の状態を見て、何かがあったということは理解しているのだから。

その言葉を聞き、美神は皆の顔を見る。皆が美神を見ている。

美神は、ゆっくりと話し出した。

横島の『夢』の話。

『夢の主人公の記憶』と、『逆流してくる感情』について。

「―――以上よ。それが、横島君が今衰弱している理由。私達はその解決法を探しに来たの。」

美神は小竜姫達を見る。

皆一様に考え込んでいるようだ。

「夢の主人公……。その記憶……。そして、逆流してくる感情……。ですか。」

「何かに追われる夢……。巨大ロボットに乗ってる夢……。」

「女の子の夢……。何かと戦う夢……。何だか無茶苦茶なのね。」

確かにその通りだ。

無茶苦茶で滅茶苦茶で荒唐無稽な御伽噺。

それが、横島を苦しめている夢だ。

「巨大ロボットかあ。関係ないとは思うけど、つい先日、アリゾナのほうで『いつの間にか存在していた』ボロボロの巨大ロボットが見つかったって話を聞いたのね。」

「いつの間にか……。ですか？」

「うん。その地区担当の神魔族が全然気付かなくて、もう何十年も前からあったみたいな状況だったそうよ。」

その話を聞き、美神は頷く。

関係は無さそうだが、巨大ロボットという点では共通している。

「もしかして、そのロボットのパイロットさんが横島さんの夢の主人公なのでは……？」

キヌは律儀に手を上げてから意見を出す。

その意見は合ってそうなものなのだが、ヒヤクメが言うには違うらしい。

「ううん。パイロットどころか、人っ子一人居なかったみたい。死体らしきものも無かったらしいし……。」

キヌはそうですかと言い、今度は考え込む。

「……今はロボットの話より、先生の夢を何とかする話をした方が良いのではござらんか……？」

シロは小竜姫やワルキューレ、の圧倒的な『力』を感じ取っているためか、いつもより覇気が無く、些か緊張しながら意見を出した。

小竜姫達はそんな彼女を見て、それもそうだと思い、頭を切り替え、また考えはじめた。

それから数分、ヒヤクメが自分の考えを口に出す。

「……要は夢さえ見なければ良いんでしょ？ でも文珠でもそれは無理だった。でも文珠よりも『強力』な道具だったらどうかしら？」

皆の視線がヒヤクメに集中する。

「昔ね？ 私は『夢』という形で他人の記憶を無意識に見ていた時期があったの。」

『……………なっ!?!』

皆は驚愕する。

同じだ。

今の横島とほぼ同じ状況。

「私は当時、今よりもっともっと未熟で、自分の意識とは関係なしに他人の心や記憶を見ていたの。」

ヒヤクメは悲しげな、寂しげな顔で語っていく。

「そんなんだから友達も出来なくてね。強力過ぎる『神眼』のコントロールが全く出来なくて、余りにも鮮烈に他人の記憶を視ちゃって、色んな影響を受けちゃって、自分が自分でなくなっていった……。」

『自分が自分でなくなる。』

もしかしたら、今の横島もそうなのではないか？

ここ最近の横島の『横島らしくなさ』は、夢の主人公の影響を受けているからでは——？

「それもあるけど、それだけじゃない。さっきチラッと横島さんを『視た』けど、横島さんが横島さんらしくなくなってきたのは、

もつと他に理由があるの。」

「それは……？」

美神が代表して聞く。

が、ヒヤクメはシロとタマモを見て、考える。

「……………それはまた後で。私が脱線させちゃったけど、今はさっきの話の続きね。」

美神は渋ったが、それを了承する。ヒヤクメは皆を見渡し、続きを話す。

「自分が自分でなくなって、ノイローゼみたいになったときに、私のお父様の上司の方が、とある神具をくださったの。それは、私の『神眼』を完全に封じ込める程の物だったわ。」

「……っな！？ 本当ですか、ヒヤクメ！」

それが事実ならば、とんでもないことだ。

ヒヤクメの神眼は、本気を出せば文珠の結界すら簡単に突破するほどの代物だ。

それを完全に封じ込めるなど、それこそ正に『神の力』である。

「それをつけたらね、何も『視えなくて』『読めなくて』、とっても嬉しかったわ。だから、それさえ使えば———。」

「ヨコシマは夢を見なくなる可能性がある……ってことね？」

タマモの確認に、ヒヤクメは大きく頷く。

ヒヤクメの神眼をも封じる神具。

それならば何とかなるかも知れない。

皆に笑顔が浮かぶ。

「……私は神界に戻って、その神具を取ってくるのね。実家に大切に置いてあるから、遅くても二時間ほどかっちゃうけど……。」

ヒヤクメは申し訳無さそうに言う。

確かにその時間はもどかしいし、その間に横島がまた夢を見て精神を蝕まれるかも知れない。

だが、希望が出てきたのだ。

今はそれに掛けるしかない。

「それじゃあ悪いけど、シロちゃんとタマモちゃんは横島さんの所に行つて、ジークと一緒に看病をお願いね。ただ待ってるだけじゃつらいだろうし……。」

「分かったでござる!!」

「……まだ安心は出来ないのね。でも、お願いね、ヒヤクメさん。」

シロは元気に、タマモは心配しながらも応える。

「それじゃあパピリオちゃん。シロちゃんとタマモちゃんを案内し

てあげて。そのままパピリオちゃんも横島さんの看病をお願い。」

「分かったでちゅ。さあ、行きまちゅよ、犬に狐!!」

パピリオ達は狼でござるとか私はタマモよとか賑やかに居間を出て行った。

美神はヒヤクメをジロツと見やる。

「……………で？ 何であの三人を体よく追い出したの？」

ヒヤクメは俯き、暗い顔をしている。

「…………それを話す前に、横島さんが横島さんらしくなかったことを話してみて。横島さんが、いつもと違う言動をしていたとか、そういうのもいいわ。」

「…………ちよつと、ヒヤクメ？ それが何か関係あるんですか？」

ヒヤクメは真剣な表情で頷く。

美神達はそれを見て、自分達が見たことのある、『横島らしくない言動』を話す。

「…………そういえば、最近やけにドクターカオスと仲が良いわね…………。何か科学の本とか、錬金術の本とかも借りてたみたいだし…………。」

「私が見たのは…………魔鈴さんに、魔法の本を借りたり、魔法について話し合ったりしているところですね…………。」

それを聞いた小竜姫とワルキューレは目を見合わせる。

——横島が、科学、錬金術、魔法について勉強をしていた——？

GSの勉強ならばまだ分かる。

魔法もまだ理解出来る。

しかし、科学と錬金術。

これは一体——。

「……………ヒヤクメ？」

小竜姫が黙っているヒヤクメの顔を覗く。

そのヒヤクメの表情は、苦虫を噛み潰したかのように、歪んでいた。

「……………それは、その変化は……………」

ヒヤクメが搾り出すように声を出す。

「その変わりようは————ルシオラさんの、霊気構造が影響しているのよ。」

——沈黙。

沈黙が場を支配する。

そんな中で、美神がようやく絞り出せたのは。

「……どうということ？」

やけにぎこちない、一言だった。

「……さっき、横島さんをチラッと視たって言ったわよね？ それで分かったの。横島さんが『横島さんでなくなってきた』って。」

今度は驚愕が支配する。

誰も彼もが声を出せない。

最初に正気に戻ったのはワルキューレだった。

「……ええい、勿体ぶらずにさっさと話せ！！ 一体どうということだ！！？」

それは、悲鳴にも似た声だった。

皆はヒヤクメを睨むように見つめる。

「……横島さんを視たとき、彼の霊気構造も視えたの。本来なら横島さんの霊気構造と同質に変化しているはずのルシオさんの霊気構造が、全く変化せずに、徐々に、徐々に横島さんの霊気構造と一つになって、『全く別の霊気構造』になっていつてるのが……。」

「な……………!?!」

言葉が出ない。

出したいのに出せない。

嘘だと言いたい。

だと言えない。

声が、出ない。出せない。

「横島さんが科学や錬金術、魔法に興味を持ったのは、ルシオラさんの靈氣構造の影響を受けたから。

横島さんが『横島さんらしくない』のは、横島さんから『別の存在』になりかけているから。

横島さんの靈氣構造とルシオラさんの靈氣構造が一つに溶け合っているのは、どうしてか分からない。
けど、一つ分かったことがあるの。」

ヒヤクメ以外は、言葉を発することが、出来ない。

そして、ヒヤクメは告げる。

残酷な、事実を。

「横島さんの靈氣構造と一つに溶け合って、別の靈氣構造に変化している……………」

つまり、ルシオラさんは横島さんの子供としても、転生することが出来ないの……………!!」

ヒヤクメは、最後には泣きながら語る。

ルシオラの転生が不可能となった。

その事実は、美神達にも重く重く、のしかかる。

「……………そ、そんな……………。そんなことって……………!!」

キヌはボロボロと涙を流し、体を震わせる。

美神は悲痛な表情を浮かべ、俯き、肩を震わせる。

小竜姫、ワルキューレ共に呆けた表情をし、今の言葉が真実かを思案する。

いや、思案する必要などない。

ヒヤクメが『視た』のならば、それが真実なのだろう。

信じたくはないが……………それが、純然たる事実なのだ。

「……………これが……………。」

キヌはぽつりと呟く。

「これが……彼女に対する仕打ちですか……。何で……何でいつも、ルシオラさんだけが……！」

その言葉は皆に染み渡る。

「ルシオウさんだけじゃありません……！」
「横島さんだって……！」

染み渡り、
思う。

何故、いつも彼女ばかりがこんな目に合うのだろうか。

何故なのだろうか。

その疑問に答えられる者はここにはいない。

否、この世界にはいない。

悲しみが、疑問が、憤りが皆を包む中、それは突然聞こえてきた。

「うわあああああああああああああああああああああ
ああ!!!!!!!!!!!!」

! ! ?

皆が弾かれたかのように顔を上げる。

声は客間の方から聞こえてきた。

それが意味することは――。

「横島君!？」

皆は居間を飛び出し、客間に向かう。

すると――。

「ぐあぁっ!？」

ジークフリートが、傷を負った状態で吹き飛ばされてきた。

「ジーク!？」

ワルキューレはジークフリートを支え、立たせてやる。

「一体どうしたのだ、ジーク! 何が……………っ!？」

刹那、背筋に這いよる寒気。

濃密な殺気。

異常な殺意。

ジークフリートが吹き飛んできた方を見れば、そこには男が立っていた。

そう、横島が立っていた。

その後ろには、殺氣に圧され、怯えているシロとタマモが見える。

一体どうしたのだ、と声を出す前に、横島が言葉を発した。

「――してやる……。」

「……………」
何？

ワルキューレは緊張しながらも声を出す。

それに反応したのか、横島の声も大きくなっていく。

「——してやる……。——ろしてやる……。——殺してやる……。殺してやる……。殺してやる……。殺してやる……。殺してやる……。殺してやる……。殺してやる！！」

殺気が、殺意が更に溢れ出す。

最早、横島の目には正気など微塵も見取れない。

「横島さん、何を――！？」

小竜姫が横島を取り押さえようとするが、それよりも早く――。

——何処とも知れぬ世界。

何処とも知れぬ空間。

何処とも知れぬ場所。

そこに、『■■■■■■■■■■』が居た。

『■■■■■■■■■■』は中空を見て、笑い、泣き、嘲笑い、心の底から愛おしそうに、恋しげに、心の底から口惜しそうに、憎々しげに、とある場면을眺めていた。

「うん、やっとここまで進んだか……。それにしても、ここまでの同調具合。

これは……もしかすると、もしかするのかな……？」

『■■■■■■■■■■』は声を発した。

とても魅力的な少女のような声で、やんちゃ盛りな少年のような声で、精悍な青年のような声で、悩ましげな女性のような声で、嗟れた老人のような声で。

その体は不定形。

形を取っては崩れ、崩れては形を取る。

ただ唯一共通しているのは、『無貌』であること。

そして、『無貌』であるのに、燃えるような三ツ目の存在——。

「さあ、忠夫君。見せておくれ、君の行き着く先を。
魅せておくれ、君の行き着く果てを。

君は僕を楽しませてくれるのかな……？

あの————。」

『混沌』が戦慄いた。

「――僕の、お人形さん――」。

『混沌』は

嘲笑い続ける。

第三話（後書き）

ルシオラファンの皆様、大変申し訳ございません。

作者が考えている別のクロスオーバーならばルシオラの救済はあるのですが、こちらの物語ではどうも……。

「光射す世界に、涙を救わぬ正義なし!!」

『御都合主義』《デウス・エクス・マキナ》発動にご期待下さい。

それでは感想お待ちしております。

タナボルタでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9230x/>

汝、魔を討つ刃となれ。

2011年11月2日01時03分発行